

## 平成 23 年度 府立佐野支援学校 評価報告書

## 1 めざす学校像

大阪の南部、泉南地域の知的障がい教育校としての 38 年間積み上げてきた実績をもとに、府立学校の教育公務員として、さらに知的障がい教育専門校の教職員としての自覚と使命感をもち、次の学校をめざす。

- 1 児童生徒とその障がい理解深化と必要な指導・支援を創出できる知的障がい教育の専門校として向上、蓄積・継承していける「運営システム」を創造する学校。
- 2 豊かな進路実現を可能にするため、卒業後を見据え、小中高一貫教育で「確かな学力、生きる力」を育む学校。特にキャリア教育で小中高をつなぐ学校。
- 3 知的障がい教育の専門校としてブラッシュアップした専門性をもって、泉南地域の支援教育のさらなる充実を地域とともに推進する学校。

## 2 学校教育自己診断における結果と分析・学校協議会における提言内容

学校教育自己診断の結果と分析 [ 平成 23 年 10～11 月 実施分 ]	学校協議会における提言内容
<p><b>アンケートの回収率について</b>            教員については 87%以上、保護者については 80.6%以上のやや高めの回収率であった。今後、教員は 100%、保護者の回収率も高める必要がある。</p> <p><b>内容について</b>            ・教員について 22 設問の殆どに対して肯定率が 70%以上であったが、「キャリア教育で小中高をつなぐ教育について」は不十分さが表れた。また、「校外研修の参加率」についても低い数値が表れ、「OJT による指導」においても数値が低かった。これは業務多忙により時間が取れないの理由が考えられる。「施設・設備」に関しては早急に改修、修繕の要求が高く評価は低い。            ・保護者について 17 設問のうち 2 問だけが肯定率 80%に満たなかっただけである。「学習内容に満足している」について 78%の肯定率があるが教育課程が合っていないというご指摘を重く受け止め、保護者と教育懇談会を検討している。「施設・設備」については一番肯定率の低い評価をいただいた。            また・バスの 2 便下校について・学年学部への引き継ぎについて・経験の浅い先生への不安・行事の見直し・夏休みの登校日減について・新校の見学会について・家庭学習について・バス部との懇談会について・現場実習と自力通学について等、自由記述から提言を多数いただいた。これに対して一つひとつ各部署で今後検討していく予定である。</p>	<p>今年度の年間テーマを「知的障がい教育校としての専門性の向上、蓄積・継承～関係機関から我が校（知的障がい教育校）に求めるもの～」とした。</p> <p>第 1 回（6/16）            保護者、就学前施設、支援教育研究機関（大学）より以下の提言をいただいた。            ①指導の継続性や系統性の確保            ②教員間の連携深化            ③子どもの正確な実態把握の実行            ④指導力の向上            ⑤説明力の向上            ⑥体力・人間力・コミュニケーション力の向上            ⑦センター的機能の発揮            ⑧就学前・卒業後機関との連携            以上を受けて「個別的教育支援計画の活用」「専門性向上のための研修（特に新任・初任に対して）」に学校として取り組んでいく。</p> <p>第 2 回（11/25）            福祉施設、地域自治体、企業より以下の提言をいただいた。            ①上級学部や卒業後の生活を見通した学習内容の設定            ②地域への広報活動とネットワークづくりの強化            ③在校生と卒業生、両保護者も含めた交流機会の確保            ④就労ミスマッチ防止に向けたアセスメント力の向上            以上の提言を受けて「キャリア教育の視点での教育課程の見直し」「地域へ打って出る教育活動（製品販売等）」「卒業生及びその保護者によるお話会」「アセスメント力向上研修（発達検査の活用）」に学校として取り組んでいく。</p> <p>第 3 回（2/2）            学校評価アンケートの分析・考察を提示し、委員から提言をいただく予定。第 1 回から 3 回までの提言を受け、学校として今後取り組んでいく教育方針（学校経営計画）を具体化する。</p>

本年度の重点目標	具体的な取組内容	取組内容の自己評価
<p>取組み①</p> <p>専門性の向上、蓄積・継承の学校組織としてのシステムを確立(1)</p> <p>専門性の向上、蓄積・継承の学校組織としてのシステムを確立(2)</p>	<p>○専門性の向上</p> <p>a 知的障がい教育校の教員として必要な「専門性」を明確にしていくため、専門性の柱を「アセスメント力」と「授業力」にして検討を開始したが、①人間性②組織人③授業力等指導支援の分野ごとの組織的な検討には入れなかった。</p> <p>b 校内専門性ブラッシュアップ研修について、第1回「WISC-IVの理論と実際～検査手続き及び結果の解釈について～」第2回「キャリア教育」第3回「身体表現活動について」を実施した。</p> <p>○専門性の蓄積・継承</p> <p>a 取り組めなかった。「蓄積・継承」の方法の再検討が必要である。</p> <p>b 初任者等本校1年目の教員の研修内容(伝え獲得しなければならぬ内容)を明確にしていくことについて次に取り組んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初任者各学部授業交流を実施した。</li> <li>・講師も含めた1・2年の教員の専門性向上研修を実施した。</li> </ul> <p>○「専門性の向上、蓄積・継承」の運営システム確立のため、「支援教育センター室」を設置し、この室の運営を協議するため推進担当での検討が開始された。</p>	<p>○専門性の向上</p> <p>a 知的障がい教育校の教員として必要な「専門性」を明確にできなかった。大きな課題であるが、学校協議会の提言も受けて整理し作成したい。</p> <p>b 校内専門性向上(ブラッシュアップ)研修を3テーマで実施できた。次年度から計画化が大切である。</p> <p>○専門性の蓄積・継承</p> <p>a 取り組めなかった。次年度支援教育センター室を中心に「アセスメント力」と「授業力」の蓄積・継承方法を検討し実施していく。</p> <p>b 初任者研修の充実に取り組んだが、初任者研修の明確化までには至らなかった。</p> <p>○次年度からの「室」の運営担当と今後の運営を創造していくための「運営検討部会」の設置を決めた。</p>
<p>取組み②</p> <p>小中高一貫教育の更なる充実に向けて現状整理と課題を探る。</p> <p>キャリア教育の更なる推進に向けて、</p>	<p>○各学部の教育目標をもとに、小中高一貫校としてのつながりの検討整理を行った。児童生徒の発達に合わせて、小から高へとつながっている一貫性と発達段階に応じた目標が設定されていることを確認した。全教科・領域での個別の指導計画を作成するにあたり、小中高をつなぐためにも、項目を統一することを決め作業に入った。各教科をつなぐため、全校教科別情報交換会の設定を提起された。新学習指導要領の移行に伴う検討を随時進めている。個別の教育支援計画にある「児童生徒の様子」にもとづく保護者や次の学年・学部へのつなぐ作業(引継等)の実効性について年度末に確認を行った。</p> <p>○国立特別支援教育総合研究所の「キャリア発達段階・内容表(試案)」を参考に本校の「キャリア発達段階表」を作成した。また、各項目の観点解説を検討し、考えられる各学部の授業内容の凡例を検討し、冊子にまとめた。</p> <p>○職業教育の引継・実践、全校で職業教育を考える意識の醸成さらに推進役の職業教育コーディネーターの設置等成果があったが、時間的余裕がなく、職業教育も含めたキャリア発達支援の分野をまとめ推進する部署、分掌の検討までには至らなかった</p>	<p>○a、cについてはできたが、bは進行中である。自立活動については「今後のあり方と相応しい体制」の研究を次年度早い時期に示す。</p> <p>○国立特別支援教育総合研究所の「キャリア発達段階・内容表(試案)」を参考にして、「本校キャリア発達段階・内容表」を策定した。小中高のキャリア教育の「指導内容」等現状の整理を行った。</p> <p>○「キャリア発達担当部署、分掌」の検討については、時間的余裕がなくそこまでには至らなかった。</p>
<p>取組み③</p> <p>泉南地域の支援教育のさらなる充実をめざす取組</p>	<p>○阪南市(教育課程共同研究)拠点校方式(小学校1校、中学校1校設定)で、小学校で8回、中学校で9回実施した。次年度の継続の申し出があるので、この1年5ヶ月の成果を確認し次年度につなげたい。</p> <p>○この取組の拡がりとしては、熊取町(授業づくり共同研究)で中学校7回、泉佐野市(進路を見据えた支援教育)でコーディネーター研修(幼小中対象)での4連続講座である。</p> <p>○平成23年度相談員登録者46名外部教育相談等を担当することによる専門性の更なるブラッシュアップにつながった。</p> <p>○本目標である泉南地域の支援教育を更に充実させるため「支援教育センター室」を設置した。そして、この室の運営を協議するため推進担当での検討が開始された。</p>	<p>○2月末に評価会議で担当者満足度たかい等の評価を確認できた。</p> <p>○2市1町に拡がった。しかし、その成果の確認で課題を探りたい。</p> <p>○「次年度からの「室」の運営担当と今後の運営を創造していくための「運営検討部会」の設置を決めた。</p>

	本年度の重点目標	具体的な取組内容	取組内容の自己評価
取組み①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の資質向上、継承・蓄積をはかる</li> <li>・生徒指導の在り方について研修する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門性の向上、継承・蓄積の学校組織としてのシステムを確立する。特に「進路指導」「職業教育」について現在までの到達を整理する。</li> <li>・教員経験の短い先生方への授業支援の在り方を検討する。特に、初任者については、小中学部での研修を実施する</li> <li>・今までにいなかったタイプの生徒への対応方法について研修をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過去のものに基づいて、計画時より一歩進んで新たに本校「社会生活」砂川校「進路学習」について一定の授業計画ができた</li> <li>・平成 24 年度は、これに基づき授業をしながら検証していく</li> <li>・他学部への研修が実施できた</li> <li>・大阪府教育向上プランに基づく公開授業を高等部および砂川校で実施、外部からも参加者を得ることができた。</li> <li>・本校だけでなく砂川校の初任者も本校小中学部での一日研修を実施できた。</li> <li>・経験の浅い先生に対する研修を毎年実施していく</li> <li>・生徒指導部では実施できなかったが、砂川校において砂川厚生福祉センター職員による SST 研修を実施した。他校からも申し込み・参加者があった。来年度は、教材づくりに取り組みたい。</li> <li>・砂川厚生福祉センターの職員による陶芸の研修も実施した。</li> <li>・砂川校において、高等学校課「育成支援チーム」事業を活用し学校の課題解決に役立てた。</li> </ul>
取組み②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路指導・職業教育の充実を図る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 23 年度より本校高等部、砂川校高等部で「職業コース」を実施する</li> <li>・本校高等部、砂川校高等部における平成 24 年度実施に向けた「類型別教育課程」を検討する</li> <li>・高等部卒業後を見据えて、中高一貫の職業教育の内容と体制を再構築する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部で職業コースを実施するとともに、さらに進路学習の内容についても検討を始めた。</li> <li>・本校において新たな職業種のシラバスを作成した。平成 24 年度は実際に運用しながら検証していく。</li> <li>・砂川校の教育課程を見直し、職業を意識した新しい教育課程を平成 24 年度実施する。</li> <li>・「職業コース」設置に伴って、本校 1 年生と 2 年生 10 月の実習期間を見直し増やした。</li> <li>・職業教育・進路指導体制を見直した。中高一貫した職業教育体制に取り組むため平成 24 年度からは職業教育コーディネーターを配置した。</li> <li>・小中高一貫の「佐野支援学校キャリア・マトリックス」を作成した。</li> </ul>
取組み③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育、福祉等の地域連携機関との連携をさらに強化する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭、学校、進路先等の関係機関をつなぐツールとなるよう「個別の教育支援計画」の活用の充実をはかる</li> <li>・職業教育をさらに充実するために、地域人材の活用を図るとともに、地域の高校等とも連携を強化する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「個別の教育支援計画」の PC への入力により共有化を図ることができた</li> <li>・進路先にもつなぐことができた。</li> <li>・また、IT 取扱規定を校内 LAN の現状に合わせて刷新した。</li> <li>・砂川厚生福祉センターをはじめ地域の人材活用はできた。</li> <li>・また、知的障がいのある生徒について地区校長会をはじめ理解推進に努めた。</li> </ul>